
時送りのダイアル

鋼野タケシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時送りのダイアル

【Nコード】

N5603J

【作者名】

鋼野タケシ

【あらすじ】

特別な理由があつたわけではない。村崎雄二はその日、仕事帰りにある雑貨屋に立ち寄った。「いらっしやいませ」温和な笑みを浮かべる老人と、店内に並べられた用途不明の品々。雄二の興味を引いたのは、桐の箱に入れられた金属の円盤……

【時送りのダイアル】

薄汚れた茶色い壁に植物のツルが伝っている。窓には曇りガラスがはめ込まれ、薄暗い室内が覗けないようになっていた。

どこの国のものか見当も付かないが、建物の正面には未知の言葉で描かれた看板が上がっている。看板があるのだから、何かの店であることは知っていた。だが、何が置いてあるのか見当も付かない。「あの店には吸血鬼が住み着いている」と言っていたのは、十歳になる従妹だったろうか。

なぜその店に入ろうと思った？ もし尋ねる者がいても、雄二には答えられなかった。はつきりした理由があつたわけではない。普段だったら、気にもせずに通り過ぎていく。たまたまその日は気分が陰鬱だった。仕事で失敗を繰り返して、こつびどく上司に叱られた日の帰り道だ。さつさと帰って酒でも飲んで、嫌なことは忘れてしまいたい。どうせ明日もくだらない仕事山ほど待っているのだから。

そう思いながらも、自然と足が店内に向いた。

多分、自虐的な気持ちになつていたのだと思う。無駄な時間を使って自分を追い詰める。どうせこれ以上最低な気分にはなれない。吸血鬼でも住んでいたら面白いじゃないか。自分が変死体で発見されたら、あの上司はどんな顔をするだろうか。

雄二は苦々しげに笑った。曇天の空と鬱陶しい霧雨が、怪しげな雰囲気に一層の魅力を加えていた。

きしむ扉を押し開け、店内に入る。来客を告げる小さな鐘が、ランと小気味良い音を立てた。

薄暗い店内は、思っていたよりも小奇麗で広い。机と棚が並び、その上に雑貨がところ狭しと置かれている。

「いらつしゃいませ」

カウンターの中でハードカバーに目を落としていた老人が、来客を見てニコリと笑った。

恐らく、この店主だろう。温厚そうな笑みを浮かべた彼が吸血鬼なら、この世は地獄の悪魔だらけだ。

棚に並べられた商品は、一見して用途のわからないものばかり。手のひらほどの大きさがある巨大な錠前。傾いたまま動かない振り子人形。錆びた金属製の棒。

「雑貨屋ですか、ここって」今更ながら、店主の老人に尋ねる。

「ええ、ええ。私が趣味で集めたものを取り扱っております。古今東西、不思議な品々がたくさんありますよ」柔らかな笑みを崩さず、老人は答えた。

外の店名を描いた看板は『ウエルベ・ルカレク』と読むらしい。

「遠い古代の国の言葉なんですが、意味は忘れてしまいました。何か不思議な意味があったんですよ」と、老人は笑いながら説明してくれた。

木彫りのハトの置物。先の丸まったドライバーらしきもの。本物かもわからない金貨。こんなもの、いったい誰が買って行くんだろうか。

「立地が悪いのか、なかなかお客さんも来ませんでねえ。何か気になるものがございましたら、ご説明いたしますよ」

滅多に來ない客に、売れそうもない商品。それでも潰れない雑貨屋。

なるほど、確かに不思議だ。

元々何かを求めて立ち寄ったわけでもない。面白そうなものもなければ、さつさと帰るつもりだった。店主には悪いが、必要のないものを買って求めるほど懷に余裕があるわけでもない。

ふと、一抱えほどある木彫りの箱が目に入った。蓋が閉められた

ままで、中になが入っているのか判別できない。

「これ、開けてみてもいいですか？」

「おお。珍しいものに目を付けられましたね。どうぞ、手にとってご覧ください」

老人の許可を取って箱の蓋を外す。緩衝材として英字新聞が詰められている。その上に、金属の円盤が置かれていた。円盤の上部分には出っ張りがあり、そこから細い鎖が伸びている。

掌大のサイズの円盤。それは古ぼけた懐中時計だった。竜頭の部分をカチと押し込むと、金属の蓋が勢い良く開いた。カチコチと時を刻む秒針の音。時計版の上部分には、今日の日付がダイアルで記されている。かなり古いもののように見えるが、ビンテージ感を出すためにわざと古ぼけて見せているのかも知れない。

時計を手にする雄二に、老人が商品の説明を始めた。

「それは時送りのダイアル。時間を早送りすることの出来る、大層不思議な時計です。古代、アトランティス大陸の超技術で作られた時計。いわゆる、オーパーツですかねえ」

変わらない笑顔で説明する老人に、思わず雄二が苦笑する。古代のアトランティス大陸で作られた時計が現代日本の時間を刻んでいるなら、確かに不思議な時計だ。

「早送りね。時間を巻き戻してくれる時計だったらありがたいんですけど」

「もちろん、そういったものもございます。ただしそちらは非常に高価で、商品としては取り扱っておりません」

意外と愉快的な老人だと、雄二は素直にそう思った。

箱には値札が貼られている。わずか五千円。アトランティス大陸の超技術とやらは、ずいぶんリーズナブルな価格で提供されているらしい。

「試してみますか？」懐中時計を箱に戻そうとした雄二に、老人はそう言った。

「試すって……何をですか？」

「もちろん、その時計ですよ」

老人の顔には先ほどと変わらない笑顔が浮かんでいる。ひよつとしたら、ジョークを言っているのではなくボケが始まっているのかも知れない。だとしたら、面倒臭くなる前に帰ろう。

「疑っているようですね？　でしたら尚更、試してごらんなさい」
心を見透かすように言われ、ギクリとする。

「その竜頭を回して、進みたい時間まで。そして押し込むのです」
老人の言葉を信じたわけではない。ただ面倒になる前に帰ろうと考えていた。一度試して笑い飛ばして、それで終わればいい。そう
だ、何も気にする必要はない。

それなのに、妙に心臓がドキドキする。

腕時計を見る。時刻は二十時四十五分。懐中時計の盤面も、一分のずれもなく同じ時刻を指していた。

竜頭を引っ張り出し、回した。懐中時計の短針を五十分に合わせた。手が震えるのは何故だろう。きっと、疲れているからに違いない。

カチリ。竜頭を押し込んだ。しばらく待ってみたが、何も起こらない。

当たり前だ。雄二は苦笑した。時間を進める時計なんて、漫画じやあるまいし。どうやら本当に疲れているようだ。老人の妄言に従うなんて。

年経た店主の言葉には妙な魅力があった。だから、不思議な気分
にさせられてしまったのかも知れない。

金属の蓋を閉めて、懐中時計を箱に戻す。明日も早いものだから、
さっさと帰ろう。

クセでチラリと腕時計を見る。時計の針は、二十時五十分を示していた。

背中に冷たいものが走る。ついさっき、ほんの数秒前。時計は二十時四十五分じゃなかったか？

何度見ても、時計は二十時五十分を指している。携帯電話を取り

出して画面を見ると、デジタルも同じ時刻を表示していた。

視線を動かし、店内の時計を探す。あった。老人の真上。時刻は二十時五十分。

「……時計が進んだ？」

「時間が進んだのですよ」

意図的な間違いを、店主が指摘する。そんな馬鹿な話があるはずない。もう一度懐中時計を取り出した。

さつきは見間違いをしたんだ。時間が進むわけがない。

懐中時計の針を十分進めて、腕時計を見る。二十時五十一分。腕時計からは決して目を離さず、竜頭を押し込んだ。途端、腕時計の針が二十一時一分を示している。

「信じる気になりましたか？」

絶句する雄二に向かって、店主が笑いかける。何度腕時計を確認しても、時間は変わらない。何かのトリックがあるとは思えない。だいたい、雄二の腕時計と携帯電話に、この老人が仕込みを出来るはずもない。

「本当に時間が……進んだ？」

老人がうなずく。

まだ信じられないという思いはあった。だが、目の前で起こったことは現実だ。

心臓が早鐘のように脈を打つ。退屈で陳腐な日常の中、突然降って沸いた非現実。次に従妹に会ったら教えてあげよう。吸血鬼よりもずっと面白いものを見つけたって。

「これ、ください」

咄嗟に口に出していた。使い道は思い付かない。でも、魔法のような道具を見つけた。この機会を逃すわけにはいかない。

「ありがとうございます」

老人がペコリとお辞儀をする。

財布から五千円札を取り出し、店主に手渡した。

「ところで……一つだけご忠告を」

懐中時計をカバンに仕舞い込み、嬉々として帰ろうとする雄二に、老人は告げた。

「物事には良い面と悪い面がございます。人の時間は有限。遅かれ早かれ人は死ぬ。さて、その大切な時間を送り飛ばせることは、果たして良いことなのでしょうか。そちらの時計は、進んだ時間は戻せません。重々、お考えの上お使いください」

外は相変わらずの雨だったが、陰鬱な気分は消し飛んでいた。この懐中時計を使えば、きつとすごいことが出来るに違いない。

時計の使い道は早速見つかった。

翌日の朝。いつものように満員の電車。新宿までの四十五分、この苦痛に耐えなければいけない。

雄二はカバンから懐中時計を取り出した。それだけの動作でも一苦労だ。ヒジがぶつかり、隣のOLがジロリと雄二を睨んだ。雄二は黙って懐中時計を操作した。竜頭を回して、カチリと押し込む。ふっと、身体に掛かる圧力が消える。気が付くと新宿駅のホームに立っていた。

通勤時間を飛ばしたのだ。突然立ち止まった雄二に、背後の学生がぶつかる。平謝りして、雄二は歩き出した。

満員電車での四十五分間は、それだけで疲労感を覚える。ところが、この時計で時間を飛ばせば一切の疲れを感じずに済む。ただ時間が飛ぶのではない。文字通り、早送りするのだ。電車の中からホームに降りているということは、雄二がやるはずだった行動は早送りされた時間の中で、キチンと行われていることになる。もし、会社の中で使ったらどうなるだろう。想像するだけで、雄二は笑いが止まらなかった。本当に魔法の道具を手に入れたのだ。

「おはようございます」

「おう村崎。おはよう」

普段なら、毎朝上司の顔を見るたびにウンザリする。今日に限ってそんな気持ちはまったく沸かなかった。

雄二は自分のデスクに座り、パソコンを立ち上げた。今日のうちにやらなければならぬ仕事を確認する。時計の針が九時を回った時点で、早速雄二は懐中時計を取り出した。念のため、まずは十分だけ時間を進めてみる。

パソコンの画面を確認すると、三十分間の仕事がちゃんと行われていた。しかも、その記憶も頭の中に残っている。本当に体感時間だけが進んでいるのだ。それなのに、疲労は一切感じない。

思い切って、時間を十八時まで飛ばした。

「あー。今日も疲れたなっ」と

隣の席に座る太った同僚が伸びをした。雄二のパソコンでは、今日分の仕事は終わっている。もちろん、疲労感はない。これから仕事を始めても良いくらいだ。

天啓が閃くように、雄二の脳裏に妙案が浮かんだ。

「あの、浜口課長」

「なんだ？ 仕事終わったらさっさと帰れよ」

こちらを見もせず、浜口課長が答える。目はパソコンのモニターに向いたまま、キーボードを力チ力チと叩いていた。

「資料作り、手伝わせてもらえませんか」

雄二が提案すると、浜口課長は胡散臭いものを見る目で雄二を見た。

「残業して稼ぎたいのか？ 忙しくなりやイヤでも押し付けるから、今日は帰れ」

「少しでも手伝わせてもらいたいです」

熱心に聞こえるように注意して、言う。もちろん、好き好んで仕事なんてやりたいワケがない。打算に基づいての行動だ。

一日分の疲労感が雄二にはなかった。それでも、必要な仕事は終わっている。もしこの後、残業して仕事を行っても、普段より働く時間が短い。疲れはほとんどないだろう。仕事量を増やして上司の

心証を良くする。出世にも近付ける。それが雄二の本音だった。

今まで見せたこともない熱意を見て、何か裏があると感じ取ったのだろうか。課長は不信そうに雄二を見ていた。

やがて溜息を吐くと、諦めるように言った。

「そこまで言うなら手伝ってもらうかな。フォルダ送るから、エクセルでリスト化してくれ」

「はい、ありがとうございます」

「アホか。礼言うのはこっちだろうが」

自席に戻り、パソコンで送られてきたフォルダを開く。直後、懐中時計で時間を三時間だけ進めた。

雄二のすぐ真横に、浜口課長が立っている。

「おう。ちゃんとやってくれたか」

そう言つて、缶コーヒを雄二に手渡す。浜口課長は懐中時計を見て、怪訝そうな顔をする。慌てて雄二は時計を仕舞い込んだ。

「わざわざ不便そうなもの使ってたな。時計ならいくらでもあるだろうに」

「好きなんです、こういうの」

あはは、と愛想笑いを浮かべる。早送りした三時間、何をしていたかを思い出す。任された仕事は終わっているようだ。

何だか妙な気持ちがした。自分がやったことなのに、いちいち思い出さなきゃいけないなんて。違和感があったが、すぐに慣れるだろう。

その日から雄二は、最大限に魔法の懐中時計を活用した。やるべき仕事を決めたら、さっさと時間を飛ばす。疲労はないのに仕事は終わる。おかげで、どんなに遅くまで残業をしても平気だった。遊ぶ時間が欲しければ、休みの日まで時間を飛ばせばいい。失敗して怒られる時も、その時間だけを進めればイヤな気持ちを感じなくて済む。「怒られた」という記憶はあっても、感情が伴わなければ不快感を覚えずに済む。

『失敗にも決して落ち込まず、積極的に他人の二倍、三倍の仕事量

をこなす』と、周りの人たちから雄二は、そんな目で見られるようになった。人が変わったかのように快活になる雄二に、上司たちも一目置きはじめた。

やがて、時間を進めるのが当たり前になる。懐中時計を手入れしてから、体感時間では一ヶ月も経っていない。それでも季節は巡り、一年が経過していた。

「やあ、村崎さん。お久しぶりです」

ある休日の昼。近所のラーメン屋に食事にも行こうと外を歩いていると、一人の老人から声を掛けられた。

「あれ……雑貨屋の店主さん」

雄二に懐中時計を売った雑貨屋『ウエルベ・ルカレク』の店主だった。久しぶりという挨拶を不思議に思ったのは、雄二にとっては雑貨屋の訪問がつい最近の出来事だからだ。たった一度訪れたきりの雄二の顔を覚えているのは、やはり客が少ないからだだろうか。

老人は小さな女の子の手を引いて、散歩の途中のようだった。孫娘だろう。雄二が挨拶すると、その娘は恥ずかしそうに老人の背に隠れた。

「時計、使われておりますかな」

「もちろん。あの日から何もかも順調ですよ。都合の悪い時間は全部飛ばす。自分にとって有益で、楽しい時間だけはちゃんと過ごしますけどね」

老人はあの日と変わらない笑顔で、雄二の言葉に頷いた。

「それは良かった。人生は楽しむためにあります。あの時計も、村崎さんのお役に立てれば本望でしょう」

ふと、単純な疑問に思い至った。あの日、自分は老人に名乗ったのだろうか。

尋ねると、老人は面白そうに笑った。

「村崎さん、この老いばれでも覚えていることですよ。まだお若いのですから、ど忘れするには早いでしょう」

名乗ったのだから知っている。当然と言えば当然の言葉に、雄二

も笑った。

談笑した後、老人に挨拶をしてその場を離れようとする。去り際の雄二に、老人は声を掛けた。

「一つだけ。これは忘れていないと思いますが、すべて物事には良い面と悪い面があります。人の時間は有限。くれぐれも使用にはご注意ください」

あの言われた忠告のことだろう。もちろん、忘れてなどいなかった。使いどころを間違えてはいけない。自分が楽しめる時間まで飛ばしてしまったら、何の意味もないのだから。

勉強する時間も仕事をする時間も、遊ぶ時間も人の何倍もある。疲労を感じる時間はすべて飛ばしているのだから。文字通り、雄二の時間はアツという間に過ぎていく。何年か過ぎて、雄二は会社で重役と呼ばれる立場になった。

時計を手に入れて以来、実家には一度も帰っていない。そんな時間があれば、出世するために利用出来る。恋人とも別れてしまった。時間が有効に使えるとわかった途端、彼女のために使う時間が勿体無くなった。

この時計さえあれば、自分の人生の幸福は約束されたようなものだ。もっと出生してからでも、家族の下に帰るのは遅くない。恋人だって、もっと良い相手が見つかるに決まっている。

取引先との商談のため、タクシーに乗り込む。行き先を告げてから、腕時計を確認した。相手先までは一時間もあればつくだろう。カバンから懐中時計を取り出すと、竜頭を回した。

「……あれ」

短針を三十分ほど回したところで、竜頭が動かなくなった。いくら動かそうとしても、ピクリともしない。

ひよつとして、壊れたのだろうか。嫌な汗が雄二の顔に浮かんだ。今更この時計なしでは生きていけない。焦燥感に狩られて時計を動かすが、無駄だった。

「くそ、今日にでもあの店に持って行こう」

頼りの綱は店主だけだった。直すことが出来なければ、この先の人生は真っ暗だ。カチリと竜頭を押して、三十分だけ時間を進める。途端、凄まじい衝撃が身体を襲った。

何が起こったかわからず、呆然とする。タクシーに乗っていたはずなのに、空が見える。まだ昼間なのに、空が夕焼けのように赤い。真冬だというのに、焼けるように身体が暑かった。

指一本動かせない。なんとか自由になる首だけを動かして、雄二は自分の身体を見た。腰から下がトラックの下敷きになっている。きつと、タクシーに突っ込んだのだろう。不思議なほど冷静に、雄二は事態を理解した。車外に投げ出された雄二は、横転したトラックの下敷きになっている。妙に暑く感じるのは、トラックが燃え始めているからだ。

顔の真横に、懐中時計が転がっている。鎖が千切れ、金属の蓋は壊れてなくなっていた。文字盤は無事らしく、キチンと時間を刻んでいる。時刻は、十四時二十三分。

時計は壊れてなんかいない。時間がそれ以上進まなかったのは、この時間が自分の終着点だったからだ……。

「試してみますか？」

老人の声が聞こえ、ハッと我に帰る。

困惑して、辺りを見回す。小さな雑貨屋の中に雄二はいた。

まるで長い夢でも見ていたかのようだ。ついさっき目が覚めたように、頭がボウツとしている。心臓が早鐘のように高鳴っていた。汗をかいているのは、店の中が暑いからだろうか。額に浮かぶ玉のような汗を、雄二は手の甲で拭った。

「試す……？」

老人の言葉をオウム返しにする。

いったい、自分は何をしていたんだっけ？ 目覚めた途端に消え

る夢のように、何かを思い出そうとしても掻き消えてしまった。

「もちろん、その時計ですよ」

左手に、どこかで見覚えのある懐中時計を握っている。

ゾクリと背中に冷たい感触を覚えた。雄二は何も答えず、その時計を箱の中に戻した。

頭がハッキリしてくる。そうだ、仕事帰りにふと思い立って、この店に立ち寄ったんだ。本当に疲れているんだな。立ったままボウツとしてたなんて。

自分にそう言い聞かせて、雄二は軽く頭を振った。倦怠感がずっしりと押し掛かっている。こんな日はさっさと帰って、酒でも飲んで眠るに限る。まったく、妙なことをしたものだ。

手の中の時計を見て、雄二は苦笑した。老人の説明を思い出す。時間を進める魔法の時計なんて、まったく馬鹿馬鹿しい。アトランティスだの超古代文明だの、いまだきゲームでもそんな言葉は出て来ない。老人のつまらない創作話に付き合うほど、自分はヒマではない。

「せっかくですけど、遠慮しておきます」

「そうですか。それは非常に残念です」

答える老人の顔は、言葉とは裏腹ににこやかだった。

その手には、雄二が手にしているものとそっくりな懐中時計が握られていた。

（後書き）

ライトノベル的なファンタジーではなく、現代日本を舞台にしたファンタジー短編。

以前に投稿した『エデンスブラッド』とは毛並みがまったく違いますが、こういうのも好きです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5603j/>

時送りのダイアル

2010年10月8日12時48分発行